

心揺さぶり続ける題材

表現者として富士山と向き合ったのは、23歳で富士吉田市に移り住んでからです。麓に来たからには、と深い考察もなймаま創作に取り組みましたが、存在が偉大すぎたのでしよう。ただひたすら感動を受け取るだけで、絵として成り立ちませんでした。

富士山を自分の感覚で捉えることができるようになるまで10年くらいはかかったでしょう。当時は浴室での家族を題材にした絵を多く描いていましたが、家族と同じような表現でいいのではないかと思うようになりました。

生活の中に富士山があり、観光で訪れた人や富士山を描くために訪れた人とは異なる感覚を得られたのかもしれませんが、もともと好きだった赤など原色で表現することが多かったです。50年以上描き続けてきて、最近は派手ではない色も使うようになったかな。

富士山は美の源泉として、詩歌



「富士山は日本の文化を創ってきた存在」と話す桜井孝美さん
—富士吉田市下吉田3丁目

や絵画、工芸を含めた日本の文化を創ってきました。これからも心揺さぶる題材であり続けるでしょう。山梨県繊維工業試験場（現県産業技術センター富士技術支援センター）の織物デザイナー担当技師として富士吉田に来ましたが、富士山の麓に住んだことをありがたいと思っています。今も起きたらまず富士山のスケッチをしています。

今年は新型コロナウイルスの影響で、富士山には登れません。私も何回か登頂し、雲海を割るようになって現れた御来光に感動した経験がありますので、登山者の残念な気持ちは分かります。

ただ、富士山は登ることだけが楽しさではありません。日本の文化や芸術の源泉となった存在を麓から自や心で味わい、感じる。この夏はそんな機会にしてもいいのではないでしょう。

〈聞き手・高野芳宏〉



「富嶽・輝」
(2009年、油彩・キャンパス、
181.8㍍×290.9㍍)

さくらい・たかよしさん 1944年埼玉県生まれ。日大芸術学部美術学科卒。第1回県新人選抜展で県立美術館賞、昭和会賞、安井賞など受賞。美術団体「100会」代表。山梨科学アカデミー会員。富士吉田市文化協会理事長。75歳。

※今年は富士山の登山道が封鎖され、登ることができない初めての夏。夏山期間の月曜日に「富士山新聞」を発行します。次回は8月10日に掲載します。